



TITLE:

痛み

AUTHOR(S):

石井, 誠士

CITATION:

石井, 誠士. 痛み. 京都大学医療技術短期大学部紀要. 別冊, 健康人間学
1990, 2: 31-37

ISSUE DATE:

1990

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/49485>

RIGHT:

痛 み

石 井 誠 士

Pain

Seishi ISHII

ABSTRACT: Pain should be studied from phenomenological, medical and health-anthropological points of view.

Phenomenologically, we explain the meaning of pain in our daily life.

Medical studies unravel the natural causality of the phenomenon of pain and investigate methods of removing its causes. Today especially, the conquest of chronic pain is one of the most important problems in a pain clinic.

Health-anthropologically we must question what the pain is and why it exists. Pain is essentially a necessary element of life; that we are bodily means that we will experience pain. We need no further answer to the question. The essential, unquestionable nature of pain like that of our existence is a key point. Pain has its roots in our contradictory being which unifies eternity and temporality, infinity and limitedness.

Key words: Pain, Health Anthropology

は じ め に

痛みは、人類の歴史と同じくらい古く、しかも科学の発達した現代でも謎に満ちた問題である。今日、ペイン・クリニックと呼ばれるような、新しい、痛みの医学が起ってきているが、それによって、痛みの仕組みや本質が明らかになってきたかという、むしろ、不明な点が明らかになった、と言われる。受胎から、永久の眠りに入るまで、私たちの生が常に共にあり、人間の根本的な問題である痛みを、私たちはいったいどのように考えたらよいであろうか。

最初に断っておくが、ここで痛みというのは、単に身体的な痛みのみに限らず、精神的な痛みや社会的な痛みも含んだものを考える。なぜかという、私たちの身体というものが、もともと精神的・社会的なものとして成立しているの、一方に、身体的な痛みでも、それを精神的な痛みや社会的な痛みから切り離して考えられると共に、他方、常に区別できない面が有ることを認めなければならないからである。

I 日常性のこととして

私たちは、私たちの日常的な痛みの経験から

出発して、痛みの特徴を現象学的に考察してみよう。痛みの場合、例えば、私たちが激しい頭痛に苦しむ場合を考えてみよう。

頭痛が起こったとき、私たちは、もう何もできなくなる。働くことも、考えることも、また、配慮することも、享受することも、さらには、眠ったり食ったりすることもできなくなる。もうただ「痛い、痛い」だけである。痛みにおいて、私たちは生活の否定、自己の全き否定にぶつかるのである。痛みの第一の特徴は、このような否定的性格、存在の全体否定的性格にある。

痛みは、この点で、死に似ている。それは、死を予徴するものである。あるいは、それは、既に死の一部、部分死である。

次に、痛みにおいて、私たちはなんとかして私たちを否定するそのものから逃れ、それを越え、支配していこうとする。つまり、痛みの否定性において、私たちは自己の存在に目覚めるのである。逆に、自己、自覚がなければ、痛みもなくなる、と言うことができる。痛みの第二の特徴は、その自己性、自覚性である。

その際、痛みは、単に身体的現象とはいえない。身体の痛みは直ちに精神の痛みでもある。それはまた、同時に、社会の、共同の痛みでもある。それらを一応切り離すことができると共に、それらはまた、切り離すことができない。それは、自己、自覚というものが身体的・精神的・社会的に成立しているからである。自己においては、それらの存在の構成要素は、それぞれ切り離されながら、一つに結びついている。

ところで、痛みが生ずるとき、私たちは、私たちを否定するそのものからなんとかして逃れようとする、あるいは、それを越え、支配しようとするが、痛みは常に、それから逃れたり、それを越え、支配したりできないものである。痛みにおいて、痛むものと痛みを知覚するもの、それから、痛みの作用と痛みの知覚とは、一つである。痛むもの自身が、自ら痛むことにおいて、痛みを知覚する。いやむしろ、私たちは、痛みにおいて、痛む自己自身に覚醒する。そして、自ら痛みながら、その痛みから解放された

いとひたすら願うのである。しかし、私たちは、この、私たちにおいて、私たちを否定する働きである痛みから逃れられない、それを越え、支配することもできない。また、それと和解し、一体となることもできない。私たちの痛みは、私たちがどうにもしがたいものである。痛みの第三の特徴は、この操作不可能性、絶対的な所与性にある。

痛みの自己性という特徴は、痛みの個人的、人格的性格につながる。痛みは本人にしか解らない。私の痛みは他人には決して解らない、他人に伝えられない。また、私の痛みは他人に代って痛んでもらうことができない。私の痛みは、私だけの痛みである。

そして、言うまでもなく、痛みは質的なものであり、しかもその質的なものは、根本的には、いかなる意味においても量的に把握されない、計測できない。しかし、それは単に主観的なものでもない。実は、その、人格的であること、対象的に把握できないことこそ痛みの客観的実在性をなす、と言える。それゆえ、人格性、代替不可能性と認識不可能性が痛みの第四、第五の特徴をなす。

ところで、私たちは、この、どこまでも個人的、人格的な、代替不可能な痛みにおいて、私たちと同様に痛みを経験している他者に出会う。私の痛みは、私だけの痛みであって、他人には解らないが、しかも、私は、この私の痛みにおいて他人の痛みに触れるのである。そういうことがなければ、私たちは他人の痛みを推測することもなしえない。痛みは共同的、共苦的である。痛みが私と汝の人格的関係の媒介契機であること、痛みの連帯性が痛みの第六の特徴をなす。

そして、実は、私たちが私たちの痛みの癒しを経験するのは、常に、他者の痛みとそこでつながる私たちのいのちの奥底から、である。ヴィクトル・フォン・ワイツゼッカーが言うように¹⁾、弟がけがをして、姉が弟の患部に手を当てる、それが痛みを和らげる。あるいは、妻が時折、居間から寝室に来て、声をかけてく

れる、それが私の頭痛を鎮める。ここにあらゆる医療の原点がある。

私たちは、先に述べた如く、痛みにおいて自己に目覚める。その自己は、しかし、分裂した自己である。つまり、痛みに対し開かれると同時に閉ざす自己である。そこで私は自棄、絶望に陥る。さもなくば、ひたすら緊張に耐えていこうとする。

また、私たちは、痛みにおいて、他人の痛みを共に痛もうとする。しかし、しばしば私たちは、他人の痛みを喜ぶか、あるいは、他人の痛みを見て見ぬふりをする。多くの同情は、むしろ単なる虚栄心の現われでしかない。痛みにおいて、人間は、このように、自己や他者の痛みから遠ざかる仕方で、自己を、また他者を、偽り、残酷になる。

かくして、私たちは、痛みにおいて、引き裂かれた自己になる。しかし、癒しは常に、この引き裂かれた自己の底から来る。痛みが私たちが自己を越えて自己を形成する自己実現のための必然的契機をなすことが痛みの第七の特徴をなす。

以上をまとめると、現象学的に把握された痛みの性格は、(1)全体否定性、(2)自己性、自覚性、(3)操作不可能性、絶対的所与性、(4)人格性、代替不可能性、(5)認識不可能性、(6)共苦性、(7)私たちが自己を越えて自己を形成する自己実現のための必然的契機をなすこと、となる。

II 医学の対象として

だが、痛みはどのように起こるのであろうか。そして、痛みの本質は何か。

「痛みはなぜ、どういう原因で起こるか」、「痛みはどうしたら取り除くことができるか」——これは医学的な問いである。つまり、医学は、自然科学的な因果を探って、その因果を具体的に断ち切る方法を見いだそうとする。

古来、鎮痛は医学の課題であった。しかし、従来の医学、特に近代医学は、病気の治療を主目的とするために、痛みと積極的に取り組むことをしなかった、と言われる。そして、医学が

病気の治療のみを考えて、痛みの治療を問題にしないところに現代の医学の欠陥を見る人もある。たとえば、現代の、癌研究の本を見ても、癌の診断、病態生理、症候、治療等の記述はなされるが、痛みについての記述はほとんどゼロに等しい。

それは、痛みの現象の把握が困難であることとか動物実験も容易でないことなどにもよるが、さらに、従来の、あるいは今日の、医学の「通説」における誤認識も原因している。

その「通説」とは、

- (1) 痛みは生体の防衛反応の一つとして出現している。
- (2) 痛みは私たちの生体を正常に維持するための警告、警報信号である。
- (3) 痛みを止めると、病気の正しい判断がつきにくい。
- (4) 痛みそれ自体は、病気や傷害の一症状に過ぎないから、痛みの根本を治療しなければ意味がない。
- (5) したがって、痛みだけを止めることは医学的には意味がない。
- (6) 発熱と同様に、痛みは生体の治癒過程の現象であるから、避けられないし、痛み止めの薬とか方法は、生体にとって却って害になる。

以上のような理由から、従来の医学において、痛みは放置しておくべきものであるとの結論が下されてきた。

しかし、今日の「痛みの医学」では、これらの「通説」が、医学の誤認識である、とされる²⁾。

なぜかという、(1)痛みは必ずしも私たちの健康を維持するための防衛反応ではない。また、たとい、その痛みが防衛反応の一つとして発現していたとしても、その防衛反応と、現在、「発現している痛み」を治療することとはまったく別の問題と言わねばならない。そして、(2)痛みは私たちの健康を維持するための警報信号ではない。例えば、癌末期に容赦なく人に襲いかかってくる激痛は、生体にとって警報装置の役割をなしていない。むしろ、痛みが生命力を弱め

るのである。その他、精神疾患性疼痛や病気や傷害が治癒した後にも痛みが持続する慢性痛の場合には、痛みは警報信号となっていない。それから、(3)痛みの発現は種々の病気の診断に重要な手掛かりにはなるが、そのことは、診断が確定するまで痛みを放置すべきである、とする何らの科学的根拠を有するものではない。また、(4)痛みが病気や障害の一症状に過ぎないから、痛みの根本を治療しなければ意味がない、という見方は、病気を見て苦しむ人間を見ない現代の医師の典型的な在り方を示すとも言う。さらに、(5)慢性痛の場合には、痛みが唯一の症状である。慢性痛は一つの独立した疾患、独立した症候群と見なければならない。だから、痛みだけを止めることは医学的にも意味がないと見るのは、実際に即していない。最後に、(6)痛みを止めることが身体に毒である、というのも、真実ではない。痛みの持続こそ身体に有害であり、適切な方法があれば、痛みは除くべきである。

このような、痛みに対する新しい科学的判断から、今日、痛みのメカニズムとその原因とを探り、それを除去しようとする学際的なペイン・クリニックがなされている。痛みのメカニズムの解明としては、よく知られている、1965年にメルザックとウォールが提出した「ゲート・コントロール仮説」があり、今でもこれについての討論がなされている。臨床的に現在特に問題になっているのは、癌やエイズなどにおける難治性疼痛や種々の精神的葛藤による心因性疼痛、そして、痛みをひき起こした原因疾患が完全に治癒しているにもかかわらず痛みが継続する慢性痛の治療である。

医学の、痛みを取り除く行為は意義をもつ。しかし、それにはやはり限界がある。一番根本的な点は、私たちが、自己の存在と一つの痛み、生きていることそのことが根本的に痛むことであるその痛みが、決して自然科学的医学の処置によっては解決できないところにある。私たちは生から、身体から、出ていくことはできない。同様に、痛みからも出ていくことはできない。

生、身体的存在とは、痛みである。仏教的に表現すれば、生とは、「生・老・病・死」ということである。私たちが痛みと一つの生、「生・老・病・死」することの外に出ていくことがありえないのに、痛みを、「老・病・死」を、なんとかしてなくさなければならない、それをなくすることが善であり、人間的なことであるとして様々な薬品や技術を投入していくことから非人間化が起こる。その一番顕著な例は、麻薬である。もとより、情報として捉えられた痛みの技術的統御は、ある程度可能であるし、治病のみならず鎮痛は医学の課題である。状況に応じては、唯いたずらに苦痛の残された生よりもむしろ安楽死を、というようなことも、あるであろう。しかし、痛みの除去の追求が、却って現実の人間性を失わせしめる、という危険が常に有ることを忘れてはならない。人間の生きることの意味はけっして病いや痛みを取り除くこと、病いや痛みがなく安楽に、積極的に言えば、快楽に、生きることにあるのではない。そして、この「生・老・病・死」、この痛む生の意味というものは、実は、生とその現象を対象的に捉える科学の立場、そして、存在に結びついてある否定的なものを悪として存在からなくしていき、いつか絶対存在に到達しようとするヒューマニズムの立場では、出てこないのである。例えば、仏教で、「抜苦与楽」とか「寂滅為楽」とかといった場合の「楽」、安楽というのは、「生・老・病・死」、痛む生を唯なくすることではなく、むしろその生から離れない、その生そのものの楽、安らかさ、を言っている。

III 健康人間学の対象として

「痛みとは何か」、「痛みは何ゆえに存在するのであろうか」——これは人間学的な問いである。実は、この問いこそ真摯な、私たちを真摯にする、本質的な問いである。

痛みとは何か。

痛みは警告である、という考え方もある。それはつまり、生命防御のための情報だ、という見方である。しかし、警告でない痛みもある。

先に述べた如く、慢性痛の場合には、痛みは警報信号となっていない。のみならず、生命から切り離されない痛みもある。

いったい、痛みは、生体の外のものであろうか、あるいは内のものであろうか。もし、それが外のものであれば、生体にとって、それは、異物であり、除けばすむものである。しかし、痛むのは生体自身であるから、痛みは、内のもとも見なければならぬ。痛みは、自己にとって異物、他者、外であると同時に、自己自身、内である。痛みにおいて、私はそれから離れようとする。しかも私は、それに結びついている。それ故、痛みにおいて自己は引き裂かれる。痛みと共に、身体と精神また内と外との分離が起こってくる。そして、私の痛みは、他人には解らない。私の痛みは、他人の痛みと比較することも、他人が代って痛むこともできない。痛みは自己的なものである。ひたすら自己自身によって耐え担っていかなければならぬものである。それゆえ、痛みは私たちに自己閉鎖を招き、他者とのコミュニケーションを不可能にする。痛みは他者との関係を遮断する。ここに「痛みの二重化」が起こる。つまり、痛みは、自己を引き裂くと共に、自己と他人との間をも引き裂くのである。それは、引き裂かれた自己の経験である。しかも、それは、私たちがそれを越えて、それから逃れていくことができない自己の全体否定的なものであり、既に、死の一部である。そして、痛みが他人に決して理解できないところに、その自己閉鎖性が、また、自己と他者との裂け目が生ずる。そして、そこから、痛みと痛む自己、引き裂かれた自己から逃避しようとして、何かに支えを得ようとしたり、あるいは、破壊的になったりして、サディズムやマゾヒズムが起こる。私たちは、物が壊れたり、他人が傷つき倒れたとき痛みを覚える。しかしまた、私たちは物が壊れたり、他人が傷つき倒れることに快感を覚えるのである。同情は、裏面に残忍さを有する。

痛みの克服は、私の痛みにおいて、私が、自己の大なる統一を回復することに成立する、

と言える。それは、自己の痛みが、自己の痛みであって単に自己の痛みでなく、存在そのものの痛みであることの直覚とも言いうる。私たちは、自己の痛みに即して、痛む身体において、存在の根本に触れるのである。「痛い、痛い」。そこで、私たちは、いわば、全世界の生きとし生けるものの痛みを痛む、共に痛む。それが、痛みからの癒しである。人間は、自分の痛みをただ一人きりで痛む。私の痛みは決して他人に伝えられない。しかも、まさにそのことにおいて、他者の痛みにつながる。そして、人間のみならず生きとし生けるものは、痛みの秩序連関の中にある。このように見ると、痛みは、死と同様に、むしろ生の必然的要素として原理的に初めからあるものである、とも言える。つまり、痛みは情報であるよりも、むしろ存在なのである。私たちが生きるということ、身体的であるということは、痛むということ、しかも共に痛むということである。

その際、V. v. ワイツゼッカーのように、癌や拷問のような「破壊の痛み Zerstörungsschmerz」と成長や創造の場合の「生成の痛み Werdeschmerz」とを区別することが可能である。 「破壊の痛み」は取り除いていかなければならないが、「生成の痛み」の方はむしろ不可避であり、取り除くべきではない、とも言える。例えば、処女の破瓜、卵子の中への精子の侵入、発芽、出産等に伴う痛みは、本質的には、「生成の痛み」である。しかし、それらは相互に区別できないもの、また、絶えず他に代っていくものでもある。思春期の成長の痛みや出産の痛みは、「生成の痛み」であるが、場合によっては、ただちに「破壊の痛み」に転ずるのである。罪の呵責の痛みも同様である。

ところで、痛みは、結局何故に存在するのであるか。なぜ、生は痛みであるのか。痛みのない生、絶対に安楽な生は不可能であるのか。

この問いは、結局、古来の哲学の神義論(Theodizee)の問題になる。なぜ、神は善であるのに、この世に悪を造ったのか。どうして存在と一つに無があるのか。何ゆえに、あちらに

多く苦しむ人があり、こちらに楽に生きる人があるのか。

哲学的神義論の解決が困難であるように、なぜ痛みが存在するのかの問いに答えることも難しい。無菌室をこしらえることができるように、まったく病気や苦痛のない人間も考えられなくはない。しかし、それはロボットのようなもので、心をもった人間とはいえないであろう。

なぜ、一方に苦痛ばかりの人があり、他方に楽に生きる人があるのか、その理由は解らない。結局、痛みの存在は、存在そのものと等しく、その理由が解らない。

おそらく、存在が矛盾をなしていることが痛みの存在する理由をなすのであろう。つまり、私たちの存在が対立と和合、独立と依存、破壊と創造、時と永遠等の矛盾的統一であるが故に、それは痛みであるのである。もし、生きているものが唯存在していて、生成も消滅もしないとすれば、生に痛みはないであろう。あるいは、生きているものが、唯一であって、多数でなかったとするならば、生に痛みはないであろう。生命は「一」であって「多」、 「多」であって「一」である。あるいは、それは、可変であって不変、不変であって可変である。そうすると、生きるということが痛むということなのであり、生と同様に、痛みにも理由がない。そして、痛みのこの無理由性 (without-why-nature)こそ、受肉の生の主体になる、と言いうる。

Es tut mir weh. と言うが、この Es が問題である。それは私ではない。しかし、私の外のものでもない。むしろ痛みにおいて、内と外とが一如、不二である。passion であると共に action である、そこに痛みがある。そこで、私の痛みは私の痛みであって、生きとし生けるものの痛みと一体である。

このように理解するならば、痛みは、生に本質的に含まれているものであり、むしろ、生そのものである。生きるとは痛むこと、「生・老・病・死」すること、である。

Ⅳ 痛みと愛

痛みは自己と他人とを引き裂きながらつなぐ。私が私の痛みを痛むことが、他人の痛みを痛むことである。そういう形で、私とまったく違う他人の痛みを私の中に痛むことこそ他人を他人として認めることの本質をなす。

この Es, 超越的にして内在的なそれは、仏教的には、『維摩経』で維摩が「衆生病むがゆえに我もまた病む」と言っているような仏、自己、キリスト教的には神ご自身、十字架上のイエスだ、とも言える。「痛い、痛い」、Es tut mir weh.—この私の痛みにおいて、ほんとうは、生きとし生けるものと共に、仏が痛む、あるいは、神が痛む、と言える。

『未完成』交響曲の作曲家フランツ・ペーター・シューベルトは、深く痛みを経験した人であった。彼の日記を読むと、至るところに、「痛み」(Schmerz)の記述に出会う。

例えば、1824年3月の日記には次のように記している³⁾。

「痛みは、悟性を鋭くし、心を強める。これに対して、喜びが悟性に働かせることは稀であり、心を軟弱に、また、軽薄にする」

と。

また、

「他人の痛みを理解する人は一人もいない。また、他人の喜びを理解する人も一人もいない。人は、常に、お互いの中に入っていけると信じている。だが、人は、常に、平行線を進んでいくだけだ。ああ、このことを認識している者にとって、これは何という苦しみであろうか。

私の作品は、音楽に対する悟性と私の痛みによって生まれたものである。痛みのみが産み出したものは、世の人々をあまり喜ばせないように思われる」

と。

また、それより前の1822年7月には⁴⁾、

「私が愛を歌おうとすると、愛は、私にとって痛みになった。そして、私が次に痛みを歌おうとすると、痛みは、私にとって愛になった。かくして、愛と痛みとが私を引き裂いた」

とも。

実に、こういう意味において、痛みは、痛みであって、また愛である、と言える。痛みが愛であるがゆえに、痛みは神聖である、いかなる痛みも「聖痛」の性格を、また、いかなる傷痕も「聖痕」(スティグマ)の性格を、もつ。そのように痛まれる痛みは、いかなる痛みも無駄な痛みではない。「共苦」(sympathy=syn+pathos), 共に苦しむこと、共に痛むことが存在の意味であり、その充実である。

私の痛みは決して他人に通じない。言葉でも行為でも伝えられない。それは、私だけのものである。のみならず、それは、私を私たらしめるもの、私の存在と一つのものである。私の痛みに対し他人は如何ともなしえない。他人は私の痛みを決して入ってくることができない。痛みは私と他人とを無限に切り離す。しかも、そこで、私の痛みは私の痛みであって、直ちに他人の痛みでもある。不二であって二、全く一体であって、しかも、絶対に孤独、これが生きとし生けるものの生と痛みとの真実相を表している。

『新約聖書』の中で、パウロは、「もはや生きているのは私ではない、キリストが私の中にあって生きている」⁵⁾と語っているが、キリスト者は、「痛んでいるのは、私ではない。キリストが私において痛んでいる」と、言えなければならない。パウロはまた、別の箇所で、「一切の被造物がともにうめきともに産みの苦しみを続けている」⁶⁾とも言っている。イエスは十字架上に血を流された。そして、すべての人の痛みを共にされた。しかし、イエスが生まれ、生きたということがすでに痛み、一切の被造物

と共にある神の痛みである、とも言える。十字架上のイエスの痛み、そして聖餐のパンと葡萄酒は、私たちの身体を貫いて働く神の慈愛の痛みの、否むしろ、私たちの必然が自由である痛みの生の象徴である。

あちらに多く痛む人があり、こちらに痛みを免れている人がある。故に、世界は悲哀に満ち、悲劇的である。けれども、この無限の不公平は、神の慈愛、仏の大悲からは、「悲しんでいる人たちは幸いである、彼らは慰められるであろう」と言われているように、無限に公平である。

やがて消えていく、あるいは私たちが取り去ったり操作したりすることのできる痛みの存在がある。しかし、消えていくことがない、また、取り去ったり操作したりすることのできない痛みの存在がある。後者は、人の決して触れえない、取り去ろうとすることがサタンとなるような⁷⁾、痛みの存在である。それは、私たちの内的生命の自由の痛み、必然が自由である痛みであり、結局、これが、「なぜ痛みが存在するのか」という問いへの窮極的な答えになる。この痛みの存在が、人間の存在の意味となるであろう。そして、この痛みの存在に気づくことが、いつでも、私たちの生の一つの大きい転換であり、大きい癒し、新しい出発をなすであろう。

註

- 1) Weizsäcker, Viktor von: Gesammelte Schriften 5, Die Schmerzen. Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1987; 27-47
- 2) 柳田 尚: 痛みとは何か. 講談社ブルーバックス, 講談社, 東京, 1988
- 3) Franz Schubert, im eigenen Wirken und in den Betrachtungen seiner Freunde (zusammengestellt und herausgegeben von Willi Reich). Manesse, Zürich, 1971; 130f.
- 4) ibid. 109
- 5) Gal. 2.20
- 6) Rom. 8.22
- 7) Cf. Mark. 8.33